



昴の今日と明日 IV

大規模入所施設は再建されるべきなのか？

～津久井やまゆり園施設再建問題にあらわれた障害施設を巡る思考のバリア～

昴☆共生社会研究所 所長 山崎晃史(ハロークリニック相談支援室)

神奈川県相模原市にある障害者入所施設である津久井やまゆり園(以下、園とする)で19人の方が殺傷されるという衝撃的な事件から1年が経ちました。

そして、この17日「殺傷事件が起きた相模原市の知的障害者施設の再建を検討する神奈川県の部会は、神奈川県の黒岩知事に対し、元の場所での建て替えとともに入所者が一時的に移転している横浜市にも施設を整備し分散する」とした報告書を提出しました。」(NHK) <http://www3.nhk.or.jp/news/html/20170817/k10011102651000.html>との報道がありました。

この事件を巡っては、さまざまな論点があぶり出されています。犯人の主張は優生思想だと批判されています。しかしマイルドな優生思想は人々の心に根を張っていることも確かであり、どう向き合っていくかは課題です。

また、被害者の氏名が公表されないことの是非が議論されています。通常なら公表されるのに、そうされないのは差別ではないかとの議論です。

さらには、外部からの不審者侵入の阻止について万全を期すようにと、県などから事業所に通知が来ています。しかし、地域に開かれた事業所であるためには防衛的、管理的にするのも程があり、実際には難しい面が多々あり、通知はいかに「行政としてやるべき指導はした」というアリバイづくりの感が否めません。

このような問題に加えて、わが国障害福祉の構造を

図らずもみごとにあぶり出してしまったのが、冒頭の記事にある施設の建て替えを巡る議論です。この園は入所定員150名の大規模施設ですが、施設を分散させ地域生活支援に移行させるという考え方と、再建して大規模なまま引き継ぐべきとする考え方に分かれたのです。

そもそも神奈川県は全面建て替えという結論をいったんは出しました。しかし、「施設から地域へ」という流れに逆行しているとして批判が噴出しました。そこで同県は「神奈川県障害者施策審議会津久井やまゆり園再生基本構想策定に関する部会」に検討を委ねたのです。

福祉新聞(2017年5月17日付)にあるように、その検討過程で当の園の施設職員や家族の多くが地域化に反対したのです。職員は「自分の仕事が否定された」と憤り、家族は、安心できる終の棲家を確保したのに事件に遭うだけで無くそれすらも失うのか、と不安に陥ったのです。 <http://www.fukushishimbun.co.jp/topics/16549>

この構図は本事件にかかわらずよくある構図です。「入所施設＝確実安心」、「地域＝不確実不安定」を施設職員も家族も信じ切っています。また入所施設があるからこそ、そこで働く我々がいるからこそ重度の障害がある人は生きていける、という施設職員の自負心がこのパターンを強化しています。これが脱施設がなかなか進まない思考のバリア(障壁)の姿であり、我々も自他のなかにあるこのバリアにしっかり向き合う必要があります。

所友の先生ご紹介 堀江まゆみ先生

「津久井やまゆり園再生基本構想策定に関する部会」の部会長を務めたのが、実は研究所の所友である白梅学園の堀江まゆみ先生です。「障害のある人のライフサイクルに合わせた地域生活支援と権利擁護」が研究テーマだと大学のホームページにあります。報道のなかで先生の発言が「時間をかけて入所者の意向を確認することを盛り込んでおり、一つ一つ丁寧に進めれば家族の不安を取り除けると思っている」と紹介されていました。

